

ブロック IV 座長 佐々木健司 (形成外科学)

10. 色素性母斑の Combined Laser 治療

(形成外科学) 岩坂 督・河野太郎・権 成基・野崎幹弘

11. 当院における小児持続硬膜外麻酔の現状

(麻酔科学) 錦織知弘・西中美江・池田みさ子・鈴木英弘

12. 新しい IVR—磁石圧挫吻合術— (山内法)

(放射線医学) 山内栄五郎・杉浦孝司・中村龍治・町田治彦・藤村幹彦・山田隆之・酒井文和・大川智彦

教育講演 薬毒物の化学分析と救急医療

(金沢大学名誉教授・前 科学警察研究所所長)

永野耐造

科学技術のすさまじい進展によって多くの化学物質も開発され、日常生活上非常に貢献しているが、反面中毒事件なども大きく様変わりしている。また、松本市や東京地下鉄サリンあるいは和歌山毒カレー事件をはじめ多くの模倣性毒物混入事件など、わが国の治安に一抹の不安を与えかねない凶悪犯罪が陸続と発生している。このような事件では、被害者の救命と犯罪捜査、という二つの面から緊急な対応が求められている。両者の目的達成には、中毒の原因物質(薬毒物)の化学的同定がキーポイントであるが、人体組織は勿論犯罪現場資料からの薬毒物の分析は決して容易なものではない。わが国の救急医療では薬毒物の化学的検査体制そのものは残念ながら、整っているとはいえない。このことは前述のサリン事件あるいは毒物混入事件などに際して、はしなくもその一端をあらわにしたといえよう。演者は大学での法医学実務としての中毒の診断や、科学警察研究所での法科学鑑定実務の立場から、サリン事件や和歌山毒カレー事件などの中毒物質分析にも関わってきた。

本講演では、このような犯罪捜査活動と一体化した立場での法科学実務としての体験をもとに、中毒の診断や救急治療をめぐる問題点について概略紹介し、ついで、金沢大学で行った薬毒物の緊急スクリーニング分析に関する調査研究の結果についても併せて紹介する。

1. イタリア産オリーブによる B 型ボツリヌス中毒の 8 症例

(¹ 神経内科,² 感染対策科,

³ 至誠会第二病院神経内科) 松村美由起¹・近藤裕美¹・竹内 恵¹・太田宏平¹・内山真一郎¹・岩田 誠¹・菊池 賢²・志関雅幸²・戸塚恭一²・相川隆司³

〔目的〕 B 型ボツリヌス中毒症の集団発生を報告す

る。

〔症例〕 1998 年 7 月 29 日から 8 月 18 日までに当科を初診した B 型ボツリヌス中毒症患者 8 例。

〔経過〕 全症例とも同じレストランでイタリア産オリーブの塩漬けを喫食した後、嘔吐、下痢等の消化器症状もしくは複視、嚥下障害等の神経症状で発症した。食材から B 型ボツリヌス毒素が検出され、診断に至った。8 例中 7 例に、摂食後 12 から 25 日目に抗毒素療法を施行し、嚥下障害等の症状の改善を認めた。また、発端者は入院当初、ギラン・バレー症候群との診断のもと、免疫吸着療法を施行したが、眼瞼下垂、眼球運動障害等の症状の改善を認めた。このことから、使用吸着剤の分析を行い、吸着剤に毒素の結合を確認した。また、実験結果から、毒素は吸着剤に吸着されることを確認した。

〔考察〕 摂食後、時間が経過した症例でも抗毒素療法が有用な例が認められた。また治療効果と実験結果から、免疫吸着療法はボツリヌス中毒症の新たな治療法の一つとなる可能性が考えられた。

2. 当院における口腔咽頭梅毒症例の検討

(第二病院耳鼻咽喉科)

荒牧 元・余田敬子・高野信也

我々が経験した口腔咽頭梅毒症例について臨床的検討を行った。対象は、1983 年より 1998 年までの 16 年間に東京女子医科大学第二病院耳鼻科外来を受診し、口腔咽頭梅毒と診断された男性 7 例・女性 11 例の計 18 例である。病変部位は軟口蓋が最も多く(61%)、次に扁桃、舌、口唇であった。口腔咽頭梅毒所見は、軟口蓋の butterfly 徴候が特徴的で、経口ペニシリン剤使用によって口腔咽頭の症状は 1 週間で改善された。治療後、2 年経過しても TPHA は陰性化しなかった。口腔咽頭梅毒症例は、現在も認められるので、日常診療に注意を要する。

3. 東京女子医科大学耳鼻咽喉科における AIDS 例(第二病院 4 例、本院 1 例)

(第二病院耳鼻咽喉科, *耳鼻咽喉科学)